癒しのスポット探訪

青森の総鎮守

善知鳥神社

青森市の中心的な神社に八幡宮が見当たらないことに疑念をもっていた。弘前には総鎮守として弘前八幡宮があり、南部盛岡藩の総鎮守は八戸の櫛引八幡宮である。伊達仙台藩62万石の総鎮守は大崎八幡宮というように武家の棟梁たちは八幡宮を重要視してきた。

青森の藩政時代の総鎮守（外浜）は毘沙門天であり、社頭には夷宮（廣田神社）を配していた。毘沙門堂内に末社として八幡宮、岩木山神社遥拝殿、松尾神社と稲荷神社の四社があった。毘沙門天が総鎮守に指名され堤から八幡宮の社地に勧請したものという。※1

善知鳥神社は寛永18年（1641）、弘前藩三代藩主津軽信義の命をうけて青森町奉行の森山内蔵之助が外浜安方に弁財天を再興したものである。社司は柿崎兵部大夫とある。縁起については木立日記によると四代信政が取り上げてそのままになっていたが雷火で消失したとも、江戸に携行、お屋敷が類焼したときに焼失したともあるという。

慶応4年（1868）神仏分離により青森町の総鎮守は毘沙門天から善知鳥神社に変更され、明治6年に県社に昇格した。明治43年の大火や昭和20年の青森空襲で社殿を焼失するも、その度に再建され、現社殿は昭和39年に竣工したもので不燃質のコンクリート構造を採用している。※2

ここにあるように善知鳥神社の古い縁起については四代信政公のときに焼失したといわれる。そうだとしても、1972年の『青森市史』10寺社編では藩政時代から現代にわたる善知鳥神社に関わる資料を詳細に記述している。引用されている資料はまさに青森市の歴史そのものに関わる重要な情報が入っていると考えてよいのではなかろうか。

現在の由緒を見れば、一見、謎だらけで荒唐無稽といってよい伝承が並んでいるようにも見える。

平安時代から現代に至るまで、多くの文化人・著名人が善知鳥神社について触れ、神社の由来、善知鳥という鳥、さらに善知鳥にまつわる伝記、伝承について残している。江戸時代には徳川将軍まで巻き込んで活発な議論を起こしたようだ。ようするに昔は有名だったのだ。

「外ヶ浜」や「うとう」は江戸時代においてさえエキゾチックな響きで、時の為政者や知識人だけではなく一般にも広く認識されていたようなのだ。（P102へ続く）

◆善知鳥神社にまつわる伝記・伝承※1

西行法師　［1118～1190］・平安末期の歌人。
「子を思う　涙の雨の　笠の上に かかるもわびし　やすかたの鳥」を詠む

藤原　定家　［1162～1241］：鎌倉前期の歌人。
「みちのくの　外ヶ浜なる　呼子鳥　鳴くなる声は　うとうやすかた」を詠む

世阿弥　［1363～1443］・謡曲『善知鳥』の作者とされる。

徳川　吉宗　［1681～1751］・江戸幕府八代将軍。
「弘前藩庁日記」（御国日記）によれば、享保4年（1719）11月、幕府からウトウについて尋ねられ、弘前藩は、寛文6年（1666）２月にウトウを献上したことがあると報告した。

奥州安達原　・人形浄瑠璃。宝暦12（1762）初演とされる。
前九年の役の安倍貞任・宗任兄弟と一族家臣の物語に謡曲「善知鳥」の世界と、安達ヶ原の鬼女伝説を配している。安倍の忠臣善知鳥安方が文治と名を変えて、安倍貞任の子の千代童の身を守護している話が描かれている。※3

「津軽図譜」より「善知鳥祠」
（県立郷土館）

◆善知鳥神社の御由緒※1

「奥州陸奥之国外ヶ浜鎮護の神として、第十九代**允恭天皇の御世に**日本の国の総主祭神である**天照坐皇大御神の御子の三女神を、善知鳥中納言安方が**此の北国の夷人山海の悪鬼を誅罰平定して此の地を治め、その神願霊現あらたかな神々を祭った事に由来している。また、**坂上田村麻呂**の東北遠征の**大同二年（807）に再建**された。

・・・爾来此の善知鳥神社は青森の発祥の地として長い間連綿として敬神崇祖の信仰が受け継がれている。」

参考文献　※1 青森市史第10巻　社寺編　1972年
※2 善知鳥神社HP https://www.actv.ne.jp/~utou/origin.html
※3 世界大百科事典 第２版